Rescue Stock Yard
2002-2012

特定非営利活動法人

レスキューストックヤード
10年のあゆみ

もくじ

代表理事あいさつ／**法人設立 10 年を迎えて** 3

ＲＳＹ前史／**前身・原点・理念** 4

年表／**ＲＳＹ10 年のあしあと** 5

10 年の活動史／**寄り添う・日常から学びあう・最後のひとりにこだわる・ひろげる** 6 –15

被災地からのメッセージ

ファーム田麦山・渡辺裕伸さん 7

穴水町ボランティア連絡協議会会長・松田栄四郎さん 7

元刈羽村災害ボランティアセンター本部長・廣川武司さん 8

高原町・光明寺坊守・鶴園恭子さん 10

七ヶ浜町社会福祉協議会事務局次長・渡邉信男さん 11

資器材等保管倉庫紹介 10

機関誌「あるある」紹介 15

法人設立10年を迎えて

代表理事・栗田暢之

法人設立10年という長きにわたり、今日まで支えていただきました会員各位はじめ、被災地で、地元で、また全国の各地域でご縁をいただき有形無形のご支援・ご協力を賜りましたすべての皆様にまずもって深く感謝申し上げます。

当法人は、1995年阪神・淡路大震災を契機として萌芽し、以降も相次ぐ災害の各現場に立ち続け、被災者と一番近い距離で様々な学びを得て参りました。また実際にこの眼で耳で見聴きした現場の現実を経験知として、次の防災・減災に役立てようとひたすら邁進してきたつもりでした。

2011年東日本大震災の修羅場と化した現場では、まるでこうした取り組みを嘲笑うかのように、過酷な悲劇が現在進行形で続いています。あまりにも無力な私たちの活動は本当に意味があることなのだろうかと、自問自答の毎日であります。しかし微力といえども、緒に就いたばかりの復興のただ中にあって、支援を止めるわけには参りません。今後もできる限りの応援を継続していく決意を新たにしているところです。

一方で、南海トラフ巨大地震への警戒がますます高まっています。また水害は毎年のように全国各地を襲っています。これからも容赦なく災害は襲って来るでしょう。まずは災害で「いのち」を奪われないために、そしてその後の「暮らし」を守るために、私たちにできることを改めて全力で取り組んで参る覚悟です。

当法人の定款には「緊急時のみならず平常時から人々が助け合い、支えあうボランタリー精神豊かな社会の構築に寄与することを目的とする。」と高らかに謳いました。理念が命のＮＰＯにあって、それを単なる理想や絵空事に終わらせないよう、10年を節目として原点に立ち返り、仕切り直して取り組んでいきたいと考えています。それには、被災者や住民の生の声をもっと聴き、もっと寄り添い、もっと語り合い、もっともっと知恵を絞らなければなりません。さらに大切なことは、皆様方からのご意見やご助言、時には創造的なご批判が必要不可欠です。ＮＰＯのみならず、社会の組織体すべてに言えることは、その取り組みがいかに多くの信頼を得ているかという点が存在意義の最大のバロメーターです。

当法人が10年の歩みで培ってきた僅かながらの信頼を損なうことのないよう、これからの10年も災害と真摯に向き合い、真面目に取り組んで参りたいと思っています。引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

2011年9月11日、宮城県七ヶ浜町の菖蒲田浜で

前身

震災から学ぶボランティアネットの会

阪神・淡路大震災が発生した1995年、大学の事務職員として学生を引き連れて神戸でボランティア活動をした栗田は、「震災を風化させてはいけない」との思いをもった東海地方の有志らと「震災から学ぶボランティアネットの会（通称・ネットの会）」を結成。これがＲＳＹの前身の団体となりました。被災地への訪問や機関誌「LiFe（リフェ）」の月１回発行、不定期の学習会を開くなどしていたところ、2000年には地元・愛知で東海豪雨が発生。ネットの会事務局長だった栗田が愛知県庁内に設置された災害ボランティア本部に入り、本部長として行政や民間団体と協力しながらセンターの運営にかかわりました。

2000年の東海豪雨時に設置された愛知・名古屋水害ボランティア本部

原点

「ＲＳＹ構想」から法人化へ

阪神・淡路大震災や東海豪雨での経験から、ボランティアは災害が起こってからの活動だけでなく、平常時の備えにも力点を置くべきだという考えがはっきりしてきました。そこで、人もモノもカネも「救援＝レスキュー」のために「蓄える＝ストック」「場所＝ヤード」が必要だという「レスキューストックヤード構想」が生まれました。

これは同じく名古屋を拠点とする「中部リサイクル運動市民の会」とも連動し、平常時にリサイクル品として集めた物資を災害時に適切に被災地に届ける仕組みをつくるイメージでした。この構想の実現とともに、増え始めていた講演会や防災マニュアル作成などの仕事を引き受けるため、ネットの会を発展的に解消し、2002年にＮＰＯ法人化したのがＲＳＹなのです。

「ＲＳＹ構想」を示すイメージ図

理念

４つのこだわりと新たな試み

ＲＳＹには大きくわけて４つの理念があり、それぞれの事業や活動が位置づけられます。

「寄り添う」は災害現場で一人ひとりの声に耳を傾け、息長く寄り添い続ける支援活動。

「日常から学びあう」は普段から隣近所で助け合える関係をつくる地域防災。

「最後のひとりにこだわる」はお年寄りや障がい者、子どもや外国人、アレルギー患者などの特別な支えが必要となる人まできめ細かくケアする災害時要援護者支援。

そして「ひろげる」は全国各地のＮＰＯや市民団体、自治体などと普段から「顔の見える関係」を築いて非常時に連携するネットワークづくりです。

これらの理念に沿った活動を展開しながら、社会や時代の変化に合わせて、ときに「防災」の枠を打ち破る新しい試みにも挑戦しています。

RSY10年のあしあと

RSY 10 Years!

年	月日	
1995	1/17	**阪神・淡路大震災**
	7月	震災から学ぶボランティアネットの会設立
2000	9/11	**東海豪雨** 愛知県新川町・西枇杷島町を中心に支援活動
2002	3/8	**特定非営利活動法人** **レスキューストックヤード設立**
	通年	「小規模作業所における防災プログラム」の作成
	通年	「名古屋市災害ボランティアコーディネーター養成講座」（～現在）
	4月	**機関紙「あるある」創刊**
	7/8	**大垣水害** 岐阜県大垣市荒崎地区への支援活動
	9月	東山学区防災コミュニティプラン①「地域の不安を出し合おう」
	12月	東山学区防災コミュニティプラン②「地域で支えあおう・独居老人宅への家具転倒防止」
2003	通年	千種区東山学区「子ども防災マップ作り」
	3月	中村区日吉学区「高齢者世帯等の家具転倒防止作業」
	7/6	**宮城県連続北部地震** 宮城県遠田郡南郷町（現・美里町）への支援活動
	7-8月	東山学区「子ども防災マップ作り」
2004	6月	「できることからはじめよう！災害弱者防災ハンドブック」の発行
	7/12	**新潟・福島豪雨水害** 新潟県三条市への支援活動
	7/17	**福井県集中豪雨** 福井県今立町（現・越前市）への支援活動
	9/24	**台風21号水害** 三重県伊勢市・海山町への支援活動
	10/17	**台風23号** 兵庫県豊岡市・三木市・洲本市・出石町（現・豊岡市）・岐阜県高山市への支援活動
	10/23	**新潟県中越地震** 「あいち中越支援ネットワーク」を立ち上げる 新潟県川口町（現・長岡市）田麦山地区への支援活動
2005	通年	「災害時要援護者のセーフティネットワークづくり調査事業」の実施
	3/20	**福岡県西方沖地震** 福島県福岡市への支援活動
	6月	山田組が企画した「供米田（くまいでん）学区地域防災大会」に応援参画（～現在）
	9/6	**台風14号水害** 宮崎県宮崎市への支援活動
2006	通年	「水害ボランティア作業マニュアルリーフレット」の作成
	通年	「ボランティア活動資器材の円滑な搬入出のための整備事業」の実施
	通年	「市民による災害救援および減災の『智恵』の収集・提供、地域防災に関する小冊子の発行および市民への防災啓発活動」の実施
	1月	**豪雪被害** 秋田県北秋田市・山本郡藤里町への支援活動
	7/15	**豪雨水害** 長野県諏訪町への支援活動
	7月	「なごや災害ボランティア連絡会」発足
	8月	日本経団連1％クラブと連携し、「うるうるパック」を長野・鹿児島へ送付
	11月	「大府市防災運動会」開催
	12月	あいち生協を通じ、田麦山地区のお米発売
2007	通年	安城市「自主防災組織活性化事業」企画・運営（～現在まで毎年実施）

定例化の第一歩

松田、涙のデビュー

かねてから取り組みたいと思っていた施設防災に着手

RSYオリジナルグッズを初めて開発。会員拡大の取り組みを強化

このときの取り組みがご縁で、東日本大震災の際に、七ヶ浜町を訪れることに

浦野、本格的デビュー

パパ・ママ世代をターゲットにした親子プログラム。参加者500名以上！

浦野、まさかの骨折（！）要援護者になる…

東海・東南海地震への布石の第一歩

災害時要援護者支援のための具体的な仕組みづくりを提案

いろいろな災害現場で見かけます！

東日本大震災でも大活躍しました

毎月第1木曜日に連絡会を開催

おそらく全国初！

いまも販売。どえりゃ～うまい！

元々の地域住民とマンションのママたちがつながり、「マンションママ」として活動を開始する

年	月日	
	3月	「防災フェスタ in 名古屋大学」への参画
	3/25	**能登半島地震** 石川県穴水町への支援活動
	5月	**RSY5周年**「感謝のつどい」を開催
	6/19	「市・名建協・なごや災害ボランティア連絡会の三者協定（ボランティア活動用資機材を分散保管する協定）」締結
	7/16	**新潟県中越沖地震** 新潟県刈羽郡刈羽村への支援活動
2008	通年	「じしんだぞうさん手ぬぐい」、RSYパンフレットの作成
	5月	西田公夫さんの記念誌「ありがとう　うれしかった」出版
	5/12	**四川大地震** パンダタオルプロジェクトの実施 （2008年10月～2010年5月）
	6/14	**岩手・宮城内陸地震** 宮城県栗原市への支援活動
	8/29	**8月末豪雨** 愛知県名古屋市内・岡崎市への支援活動
	9/10月	「災害からいのちと暮らしを守るための減災キャラバン活動事業」
	11月	四川大地震被災地視察
2009	通年	「災害からいのちを守る防災教材」の制作
	8/10	**台風9号水害** 兵庫県佐用町への支援活動
	10月	RSY事務所、名建協2Fへ移転
	11月	子ども防災イベント『じしんってなぁに？遊びながら学べる災害時に役立つ「ワザ」』
2010	6月	氷砂糖全国一のメーカー「中日本氷糖」と災害時協定を締結
	7/19	**山口県豪雨** 山口県山陽小野田市への支援活動
	9/8	**台風9号** 静岡県小山町への支援活動
	9月	浦野愛、アメリカ研修へ
	9/25	**奄美大島豪雨** 鹿児島県奄美市への支援活動
	10月	愛知県防災関係団体等実態調査業務の一環として、「愛知県内のボランティア団体・NPO等を対象に災害発生時の活動やふだんの防災活動に関する調査」を実施
2011	1/26	**新燃岳噴火災害**
	2-3月	宮崎県高原町への支援活動
	3/11	**東日本大震災**
	3/14	浦野愛、帰国 宮城県宮城郡七ヶ浜町への支援活動 「震つなROAD事務局（東京・日本財団）」にスタッフ派遣、足湯隊の派遣を開始 栗田が「東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）」の代表世話人となり呼びかけ
	4月	「ボランティアきずな館」OPEN 七ヶ浜町へのボランティアバス開始
	6月	「愛知県被災者支援センター」開設
	8/30	**台風12号** 三重県紀宝町への支援活動
	9/20	**台風15号** 愛知県名古屋市守山区への支援活動

RSYの主な被災地支援活動

- スタッフ、ボランティアの派遣
- 資器材の搬出
- ボランティアセンター立ち上げ、運営協力
- ボランティアバスの運行

機関誌「あるある」60号より／作成・山田光

寄り添う

2003年　宮城県連続北部地震

2003年7月26日、宮城県北部を震源として震度6弱の地震が1日に3回発生。負傷者600人を超える大きな被害が出ました。ＲＳＹは被災地の南郷町（現・美里町）災害ボランティアセンターにスタッフを派遣。後に東日本大震災での七ヶ浜町支援につながる宮城県との縁が生まれました。

2004年　台風23号水害

2004年10月9日、四国に上陸した台風23号は日本列島を横断、近畿や東海地方を中心に全国で死者・行方不明者が98人に達する大災害となりました。

ＲＳＹは神戸の被災地ＮＧＯ協働センターにスタッフを派遣。関係団体のボラコなごやからも4人が兵庫県豊岡市に入り、ボランティアセンター運営を支援しました。

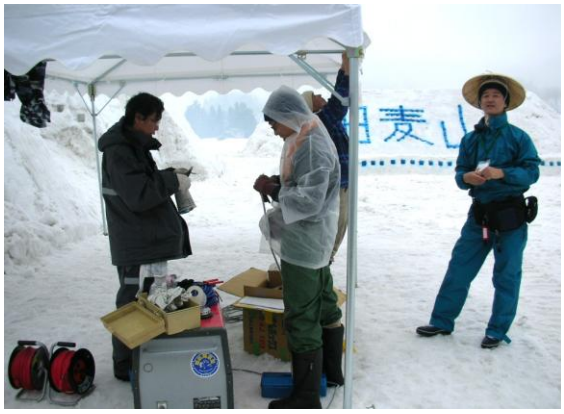
ボランティアバスは計3回延べ106人、資器材の提供は計4回にわたり、台風21号被災地の三重県海山町から豊岡市や香川県さぬき市にも連続して送ることにもなりました。

豊岡市の災害ボランティアセンター

2004年　新潟県中越地震

2004年10月23日、新潟県中越地方を震源とするＭ６・８の直下型地震が発生。最大震度7の揺れが同県川口町などの中山間地を襲い、死者は68人に達し、約10万人が一時避難しました。

ＲＳＹは愛知県内のＮＰＯ、ボランティア有志らと先遣隊を組んで現地を調査、11月中旬に県内約30団体とともに「あいち中越支援ネットワーク」を結成、川口町田麦山地区を中心に中長期的な視点での復興支援に乗り出しました。



愛知から参加した田麦山の雪まつり

活動は避難所でのケアから仮設住宅への引越し手伝い、被災2カ月後のクリスマスプレゼント配布、年明けの七草がゆの食事会、2005年の愛知万博への田麦山小学校全校生徒招待など多岐、長期間にわたり、現在も田麦山の米を愛知県内で販売するなど交流を続けています。官民による中長期的な復興支援活動のモデルとして、2005年度の防災功労者防災担当大臣表彰を受けました。

被災地からのメッセージ

●ファーム田麦山
渡辺裕伸さん

私がＲＳＹとの関わりについて語るとき、常に頭の中に、ある言葉を思い出します。代表の栗田さんと出会った当初、「私達は今、この時点だけのお付き合いではなく、細く長いお付き合いができればと考えています」という言葉です。最初はまったく意味が理解できませんでした。８年経った現在、その意味を実感することができています。それは一時的なお付き合いではなく、少しの共有できる短い時間の積み重ねから「絆」を深め「友」になるという事なのかと感じています。（私、個人的な所感ですけど…。）

東日本大震災で被災された方々にとって、これからの「復興」に向け、皆さんは無くてはならない存在と身を持って確信しています。

私達以上に長期の時間を要すると考えられる中で、微力ながら我々に出来ることがあればお手伝いしたいと思っています。

そして、被災した方々に対し良き活動ができますよう、皆さんご自愛ください。

被災した方々及び被災地の一日も早い復興を祈念するとともに、皆様方のこれからのご活躍を「たんぎゃま」から応援しています。

今後も「細く長いお付き合い」をよろしくお願いし、設立 10 周年のお祝いのメッセージといたします。たんぎゃまのヒロノブより。

寄り添う

2007 年　能登半島地震

2007 年３月 25 日、能登半島沖の日本海を震源とするＭ６・９の地震が発生。石川県輪島市や七尾市、穴水町で震度６強が観測されました。

ＲＳＹは穴水町にスタッフを派遣、地元ボランティアとともに避難所、仮設住宅への支援やうるうるパックの配布、名古屋のボランティアによる足湯で被災者をいやしました。

現在も周年イベントへの参加や商店街の復興などにかかわり、交流を続けています。

震災２周年で名古屋から持ち込んだ灯籠

被災地からのメッセージ

●穴水町ボランティア連絡協議会会長
松田栄四郎さん

能登半島地震から５年が過ぎ当時のことが思い出され、ＲＳＹの方々の支援活動に救われた思いにさせられ感謝しています。本当にありがとうございました。

栗田さんのご活躍されているお姿をテレビ等で拝見し、また、穴水中学校へご講演に来て頂き、日本の防災復興に貢献されている功績は大きく、頼もしくうれしい思いにさせられます。

穴水町の災害復興事業もお陰様で順調に進み、その恩恵に被災者の皆さんも感謝しております。災害当時、私らボランティア連絡協議会も戸惑いが多く、困却していたとき、いち早く栗田さんをはじめ浦野さん、松田さんと大勢で救援の第一線で活躍され、行政の支援態勢も整いほっとしたというのが現場の状況でした。救援スタッフをはじめ支援の皆さんも大変感謝しておりました。

ＲＳＹさんも 10 周年の節目を迎えるに当たって、災害の多い日本ではとても貴重な存在であり、今後のご活躍にご期待申し上げます。

私も 80 歳になりましたが、お陰様で元気で残された人生を大事に頑張っています。私の残された悔いのない人生とは、一人でも多くの方に幸せと生きがいを感じてもらう架け橋の役目をすることでないかと思い、老いに鞭打って頑張りたいと思っています。

2007年　新潟県中越沖地震

2007年7月16日、中越地震の記憶も新しい新潟県を、再び激しい揺れが襲いました。M6・8、死者15人の惨事とともに、活断層の真上にあった原発の安全性がクローズアップされました。

ＲＳＹは刈羽村にスタッフを派遣、うるうるパックの配布を行ったほか、日本災害救援ボランティアネットワーク（ＮＶＮＡＤ）、被災地ＮＧＯ協働センターとともに「寄り添いプロジェクト」も始め、被災者一人ひとりの声を丁寧に聴くなどしたほか、瀬戸や土岐から譲り受けた陶器を提供する瀬戸物市を開催。5周年の2012年も交流ツアーを予定しています。

被災地からのメッセージ

●元刈羽村災害ボランティアセンター本部長

廣川武司さん

平成19年7月16日、新潟県中越沖地震発生。刈羽村にも災害ボランティアセンターが設置され、ボラセンの組織も業務内容、そして運営など全然無知な私が本部長を受けることに。

ボラセン設置後2～3日は誰と会ったのか、なにを聞いたのか記憶にない。でも中越復興市民会議のリーダーから「愛ちゃん」が入ってくれたら刈羽ボラセンはうまく回るよ、と言われた。それは3年前の中越地震後のボランティア活動の実績が有ったからだと思いました。「愛ちゃん」てどんな人？　その時は名前と顔が一致せず、頭の中では50歳代のおばさんをイメージしておりました。（叱られるかな？）

でも後で知った時、若くてびっくりしました。私の子供と同世代（愛ちゃんの年齢は今でも分かりませんが）。

知識と行動力が有り、活動前の指示、ミーティングでの聞き取り、アドバイスなど、いろいろな経験を基にした実力者だと思いました。その上「かわいい」し、周りの人に「優しい」、口には出さなかったが愛ちゃんを見ると「ドキドキ」したものでした。

避難所を回り、被災住宅に居る被災者に会い、わずかな「つぶやき」も聞き漏らさず、村民の声をとりまとめ、最終的には村長にまで取り次ぐ。すごい事だと思いました。

また、愛ちゃんの代わりに来てくれた「松田さん」も良く動いてくれました。特に名古屋から来るとき、私に「金のシャチホコと目ン玉おやじ」の根付けをおみやげに頂きました。（現在も携帯電話に付けて大事にしております）

以来、岩手内陸地震後、現地で合流視察をしたり、刈羽や名古屋で交流会をさせて頂いたり、東日本大震災後、宮城県七ヶ浜町や亘理町への訪問声掛けなど大変お世話になっております。また今後もお付き合いよろしくお願い致します。

レスキューストックヤードさんの益々の結束とご発展をお祈り致します。

寄り添う

2008年　四川大地震

2008年5月12日、中国・四川省を震源とするＭ８級の直下型地震が発生。死者・行方不明者８万人超、4000万人が被災する大災害となりました。

ＲＳＹは現地にスタッフを送り込んだＣＯＤＥ海外災害援助市民センター（神戸市）の活動を支援する募金を呼びかけるとともに、活動の報告会を名古屋で開き、日本からできる支援のあり方を検討。神戸の「まけないぞう」をモデルにした「パンダタオル」プロジェクトを進め、現地の被災者に手渡しました。

四川の被災者に手渡したパンダタオル

寄り添う

2008年　岩手・宮城内陸地震

2008年6月14日、岩手県内陸南部を震源にM7・2の地震が起こり、岩手県奥州市と宮城県栗原市で最大震度6強の揺れを観測しました。

ＲＳＹは栗原市にスタッフを派遣。03年の地震以来、交流のある宮城県社協などと連携し、ボランティアの受け入れや個別ニーズの対応に努めました。

また、くりこま耕英復興の会への支援として、中越や能登との交流会の開催や、日本災害復興学会のメンバーらとの被災者交流会なども開き、そこでの交流や連携をのちの東日本大震災の支援に生かしています。

2008年　8月末豪雨

前線を伴った低気圧の影響で、東海地方では2008年8月28日夜から29日未明にかけて記録的な大雨に見舞われました。愛知県岡崎市では時間雨量146.5ミリという猛烈な雨が襲い、市内の伊賀川などが氾濫、浸水家屋のお年寄りらの命が奪われました。

ＲＳＹは岡崎市にスタッフを派遣、名古屋市では「濡れた畳の上でじっと耐えているお年寄りらを取り残さない」という掛け声のもと、なごや災害ボランティア連絡会として連日、各地の社協職員や名古屋のボランティアと被災地を歩き回り、ニーズの掘り起しなどに徹しました。実際に、被害を訴えられずにいる独居高齢者や外国人世帯が見つかり、都市型災害の「盲点」が大きな教訓となりました。

濡れた畳を切って運ぶボランティア

2009年　台風9号水害

2009年8月9日、日本のすぐ南の海上で発生した台風9号は西日本を中心に猛烈な大雨を降らせ、大規模な洪水や土砂崩れを引き起こしました。

兵庫県佐用町に運び込んだ資器材

ＲＳＹは死者・行方不明者20人という大きな被害を受けた兵庫県佐用町に数回にわたって資器材を提供、なごや防災ボラネットと連携してスタッフを派遣し、地元のボランティアセンターの運営などを支援。その後も陶器の提供や復興まつりへの参加などで交流を続けたほか、水害の一因とされる山林の環境破壊について取り組むきっかけとするなど、被災地からの学びを生かそうとしています。

2011年　新燃岳噴火災害

寄り添う

2011年1月26日、九州南部の活火山、新燃岳（しんもえだけ）が52年ぶりに噴火。東に位置する宮崎県都城市と高原町に大量の火山灰が降り注ぎました。

ＲＳＹは一部で避難勧告が出された高原町にスタッフを派遣、青山学院大学の学生グループなどと協力し、足湯や灰掃除のボランティアを続けました。

その後の東日本大震災では、被災地ＮＧＯ協働センターの取り組みを通じてこの地域の野菜を東北に送るなど、被災地同士の交流にもつながりました。

足湯をしながら語りかけるスタッフ

被災地からのメッセージ

●高原町・光明寺坊守

鶴園恭子さん

宮崎県高原町は2011年1月に新燃岳噴火災害により災害地として知られるまで、過疎に悩み自信を無くした町でした。山本来の荒々しい姿に打ちのめされ、生活基盤や日常を失ったことに町民は強いストレスを感じていました。そんな不安な日々に真っ先に歩み寄り、あらゆる手段で和ませ、奮い立たせて下さったのがＲＳＹです。

被災時には隠れていた地域の弱点が露呈しました。目を伏せていた多くの苦しみが露わになりました。ＲＳＹが、高原町に潜んでいた弱点に目をそむけず寄り添って下さった時、被災した私達も、この地で生きていくことや人間関係を喜ぶことができました。

高原町で生きていきたい。これは、ＲＳＹが「高原町は素敵な町」だと教えてくれたからです。私達が喜べなかったことを、ＲＳＹのスタッフが喜んでくれたからです。これからも末永くＲＳＹのもつ「人を地域をいかす力」を日本の隅々に届け続けて下さい。

資器材等保管倉庫

名古屋から全国各地に送付する災害ボランティア用資器材や救援物資は、主に名東区と港区にある２つの倉庫に保管しています。

名東区の通称「名東倉庫」は市有地に置かれた４基の貨物コンテナと一つのプレハブ小屋。もともと東海豪雨時に名古屋青年会議所から提供された資器材を保管するため、日本財団と名古屋建設業協会の支援で、なごや災害ボランティア連絡会と市が設置しました。住宅街の中にあり、2008年には地元の引山学区の子どもたちに絵を描いてもらいました。

もう一つは東海建設株式会社所有の倉庫の一画。資器材や物資の保管以外にも「うるうるパック」の袋詰めなど、作業スペースとしても提供いただいています。

現在のＲＳＹの活動は、この２つの倉庫がなければ成り立たないといっても過言ではないほどです。

住宅街にある名東倉庫

物資保管のほか作業スペースとしてもお借りする東海建設の倉庫

寄り添う

2011年　東日本大震災

2011年３月11日午後２時46分、三陸沖を震源にＭ９の巨大地震が発生。太平洋沿岸に大津波が押し寄せ、東北の街が一瞬にしてのみ込まれました。翌日には東電福島第一原発が爆発し、放射能汚染をもたらしました。ＲＳＹ設立 10年目にして発生した未曾有の複合災害、東日本大震災です。

通信や交通手段の途絶える中、発生直後に山形経由で先遣隊が入り、宮城の沿岸各地の状況を把握。七ヶ浜町を支援することに決め、１カ月後には日本財団ＲＯＡＤプロジェクトのご支援により、プレハブの拠点施設「ボランティアきずな館」を建設、スタッフの常駐態勢をつくりました。

名古屋からのボランティアバス運行は 50 回を超え、現地での足湯活動のほか、復興イベントや仮設商店街のお手伝いなどさまざまな形の支援を、10年の総力を挙げて続けています。

発生直後から七ヶ浜町で継続している足湯ボランティア

被災地からのメッセージ

●七ヶ浜町社会福祉協議会事務局次長

渡邉信男さん

平成18年１月28日、七ヶ浜国際村ホールは満席、災害ボランティアセミナーが開催されました。講師にはＲＳＹの栗田暢之氏をお迎えし、阪神大震災や北部連続地震等のスライドを交えながらの講演でした。初めて栗田さんと出会った日でした。

当時、高い確率で必ず来るといわれた宮城県沖地震、町民の多くが災害や防災に高い関心を持っておりました。終始パンチの効いた内容の話に会場は興奮状態でした。私が一番印象に残ったのが「大災害を被り自分達で解決出来ない事態には、苦しさを外に発信する事も重要」との事でした。

東日本大震災の直後、我々はこの先何をすべきか、何を頼りにして行くべきか迷いと不安の日々でした。その最中レスキューの先遣隊として関口さんが来町、本当に嬉しく感謝の気持ちで一杯でした。栗田さんの講演の言葉に甘え、全面的に外部支援をお願いすることにしました。

あれから１年３ヶ月、レスキューさんの導きにより被災された方々の支援事業に取り組んでいます。新たな課題も一緒に考えて頂き、解決策を見出しております。本当に有難く衷心より御礼を申し上げます。

震災直後の2011年３月にボランティアセンターの運営に当たる渡邉信男さん（左）

日常から学びあう

2002年～　災害ボランティアコーディネーター養成講座

災害ボランティアは日々、進化しています。日ごろから訓練や意見交換を重ね、いざというときにより多くの人が動けるように学びを続けています。ＲＳＹは全国各地でボランティア関係者の養成講座などを開き、人材発掘や育成に努めています。

中でも発足当初の 2002 年度からＲＳＹが企画・運営を受託している「名古屋市災害ボランティアコーディネーター養成講座には、これまで 14 期、850 名あまりの市民が受講、修了されました。

講座では座学のほか、災害が起きた想定でボランティアセンターを実際に設置する運営訓練などを行っています。

2002年　東山学区防災コミュニティプラン

初期に事務所を置いた千種区の東山学区から相談を受け、地域と協力して実現した地域防災の取り組みが同学区防災コミュニティプラン。

初回は講演会と地域の課題出しワークショップ、避難所体験。２回目は、民生委員を通してあらかじめ希望をとった学区内の高齢者世帯 24 軒を建築士らとともに訪問し、住民がボランティアとなって簡易耐震診断と家具の転倒防止作業を実施。そして３回目は子どもを主体とした防災マップづくり。

工夫を凝らした効果的なプログラムが大きな反響を呼び、その後、各地に展開する防災プランづくりのモデルケースとなりました。

2005年　刈谷市自主防災組織活性化事業

愛知県刈谷市の富士松南小学校で行った避難所体験。夏休みの体育館をお借りし、高学年の児童 50 人ほどとその保護者に非常持ち出し袋を持参して来てもらい、中身をチェックし、非常食で炊き出しをしてもらいました。地区の長老から地震の歴史などを聞いた後、体育館の床に寝袋で就寝。翌日は乾パンで朝食をとり、家の中の安全についてグループで話し合うなどしてもらうプログラム。

防災を「子どもの視点」で自ら考え、行動するよう促す画期的な試みとして注目を集めました。

2006年　大府市防災運動会

愛知県大府市にある中京女子大学で、日本初と思われる「防災運動会」を開催。竹と毛布の簡易タンカによるリレー、大声競争、防災地図づくり、バケツリレーなど６競技で「防災力」を競い合いました。防災を切り口としたコミュニケーションの場づくりとして、多くの地域で取り組まれています。

防災運動会で行われた「大声競争」

日常から学びあう

2007年～　安城市自主防災組織活性化事業

耐震性は十分。でも水も電気も止まるかもしれないし、隣近所の名前も知らない…。そんな不安を抱える安城市の高層マンションの住民と元々の地域の住民が一体となった防災の取り組みに参画しました。

通称「マンションママ」と呼ばせていただいた元気でまじめなお母さん方と意見交換し、その意見をもとにはしご車や非常用階段を使って避難訓練なども行った先進的な取り組みとなりました。

非常用階段を使った避難訓練

2008年～　こども防災イベント

自分の身を守る防災の知識は子どもときから身につけてほしいものですが、学校教育の中でも防災教育はまだ不十分で、子育て世代の親は具体的な対策を考える機会が少ないのが現状です。

水消火器の的当てゲームを楽しむ子ども

そこで、親子が楽しく防災を学べる場を設けようと、2008年に愛知淑徳大学のキャンパス内で、09年は戸田川緑地公園で、こども向け防災イベント「じしんってなぁに？」を開きました。普段、防災イベントにはなかなか顔の見られなかったパパママ世代が子どもたちと楽しくイベントに参加してくださいました。2012年度は3年ぶりの開催を計画しています。

2010年　防災の森づくり　川づくり

全国的に増加する水害の一因が「上流の山林の荒れにある」と聞かされたわれわれは、山の木の活用や昔ながらの川づくりを学ぶ取り組みを始めました。2010年度はセブンイレブンみどりの基金助成事業として、広葉樹の枝を束ねた「粗朶（そだ）」づくりを岐阜県の里山で学び、それを生かした川づくりの一部を名古屋の都市河川、矢田川で再現しました。

2011年度はこの試みを発展させ、本格的な河川伝統工法の再活用を探るプロジェクトを、あいちモリコロ基金の助成事業として着手。環境保全が災害の被害抑止につながることを示す新たな取り組みの一つです。

矢田川で行った「粗朶沈床工」の再現実験

最後のひとりにこだわる

2004年　障がい者の小規模作業所防災プラン事業

障がい者の小規模作業所では施設の構造や人材、資金、時間、知識の不足などの理由で十分な防災対策が取られていないケースが多くあります。そこで名古屋市内の重症心身障がい者通所施設と精神障がい者小規模作業所で、耐震診断や家具転倒防止、地域ぐるみの防災訓練など、施設独自の防災プログラムを１年をかけて検討し、実施するまでのお手伝いをしました。

「地域がこんなに温かく受け入れてくれるとは思わなかった」という施設職員や「私たちにもできることがあり、お互いに助け合うことの大切さが分かった」という地域の方々の言葉に、福祉施設が地域の防災拠点になりうるという新たな可能性と役割が確認できました。

障がい者施設を含めた地域ぐるみでの防災訓練

2006年　高齢者・障がい者にかかわる避難所対策提案

東海・東南海地震や水害の影響を受けやすい名古屋市港区の港楽学区で４つの町内会合同の「避難所運営委員会」ができ、障がい者や高齢者に配慮した避難所運営訓練を行いました。

障がい者も一住民として「避難所の改善点チェック」などに参加、運営委員からは「当事者の方と行動して本当に必要な支援が分かった」との言葉が聞かれました。これまでの当事者不在型の要援護者対策の進め方に一石を投じる取り組みとなりました。

2007年　災害時要援護者のｾｰﾌﾃｨｰﾈｯﾄﾜｰｸづくり調査

2005年の「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」策定を受け、愛知県蟹江町をモデルに地域レベルでの助け合いの仕組みづくりに取り組みました。

ガイドラインで提唱された「要援護者の名簿づくり」「一人ひとりの避難計画づくり」「避難計画が機能するかを確認するための避難誘導訓練の実施」を３つのステップとして行い、成果と課題を整理しました。

これを契機に対策に取り組む自治体や自治会が増え、ＲＳＹとしても要援護者対策の基盤ができました。

2008-09年　岡崎市災害時要援護者支援地域モデル事業

作成した手引き書

愛知県岡崎市が作成した災害時要援護者名簿が、自治会で有効に活用されるための手引書づくりを行いました。２つのモデル町内会の事例を分析し、取り組みを行う際の地域の不安や疑問、生じる問題を解決するための具体的な手法を紹介。翌年度は手引書の簡易版を作成し、他地域での取り組みの拡大につながりました。

ひろげる

震災がつなぐ全国ネットワーク

1995 年の阪神・淡路大震災以降、全国の団体･個人がゆるやかなネットワークでつながり、過去の災害から学び、提言し、緊急時には協働することを基本として活動しています。

2012 年 6 月現在、団体正会員 24、個人正会員 12、賛助会員等 6 で構成され、ＲＳＹは 2005 年から事務局を担っています。

災害現場にいち早く駆けつけ､｢被災者に寄り添い、支援の届かない地域をつくらず、最後の一人まで救おう｣を理念として活動。東日本大震災では日本財団のＲＯＡＤプロジェクトに参画、東京事務局を設置して全国の震つな加盟団体の拠点に足湯ボランティアを派遣しました。

平常時には｢移動寺子屋｣を各地で開催し、つながりを広げる活動を展開。過去の災害を教訓としたブックレットも 9 冊刊行しています。

防災のための愛知県ボランティア連絡会

災害時のボランティア活動をスムーズに行うために必要な平常時からのネットワークづくりを推進することを目的として、愛知県とＲＳＹを含め県内の市民団体 14 団体で構成。2 カ月に 1 回の定例会や､｢防災＆ボランティアフォーラム｣の企画・運営なども行っています。

なごや災害ボランティア連絡会/なごや防災ボラネット

2006 年 7 月に発足した｢なごや災害ボランティア連絡会｣は、名古屋市内全 16 区の防災ボランティアグループと市、市社協、ＲＳＹを含めた 22 の市民団体で構成。月 1 回の定例会で情報交換を行い、横のつながりを築いています。

その実働部隊である｢なごや防災ボラネット｣は防災関連イベントや講座の企画､運営を行い、市民への啓発活動に励んでいます。

ＲＳＹはこうした連携と協力のもと､｢防災フェスタ｣などの啓発イベントを開催しています。

機関誌「あるある」

60 号の表紙

ＲＳＹの活動を伝える機関誌「あるある」は設立以来、２カ月に１度欠かさず発行。2012 年 3 月に 60 号を数えました。

週一ペースの編集会議にはいつも５、６人の編集委員が集合。発送日にも大勢のボランティアさんが来て、折り込みや封詰めの作業を手伝ってくれます。

【その他のネットワーク】
- 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援Ｐ）
- あいち防災協働社会推進協議会
- 東日本大震災支援全国ネットワーク（ＪＣＮ）
- 震つな×日本財団ＲＯＡＤプロジェクト
- あいち・なごや東日本大震災ボランティア支援連絡会
- 愛知県被災者支援センター
- 東日本大震災被災者支援ボランティアセンターなごや

【表彰】
- 2002 年　第一回ナゴヤＮＰＯアワード優秀賞
- 2003 年　人にやさしい街づくり賞
- 2003 年　社会福祉法人坂祝町社会福祉協議会感謝状
- 2003 年　防災功労者防災担当大臣表彰受賞（あいち中越支援ネットワークとして）
- 2004 年　岐阜県知事および高山市長感謝状（2004 年台風 23 号豪雨水害）
- 2005 年　ゆめ風基金・全労災特別賞
- 2008 年　穴水町長感謝状
- 2008 年　ボランティア功労者厚生労働大臣表彰（震災がつなぐ全国ネットワークとして）

次の 10 年も、一緒に歩もう
災害に強いまちづくりを目指して

会員募集、活動支援金の募金など、詳しくはお気軽に事務局まで

郵便振替

口座番号　00800-3-126026

加入者　特定非営利活動法人レスキューストックヤード

銀行口座

三菱東京ＵＦＪ銀行　本山出張所

普通　3505681

口座名義　特定非営利活動法人レスキューストックヤード

特定非営利活動法人
レスキューストックヤード

10 年のあゆみ

2012 年 6 月 23 日発行

特定非営利活動法人レスキューストックヤード

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web http://rsy-nagoya.com/

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya